絵本浄瑠理姫譚四巻

浄瑠璃媛物語巻四

東都　狂蝶子　文麻呂　著

○うつ蝉

衣の里の別荘にハ、瑠理君白糸もろともに、何地へかなくならせ給ひしとて、附従がふ女ども、のゝしりさわぐを、かの口きゝの局左近ハ、年も闌て思慮あるものなれバ、おのれはからふべきやうあり、此事更に沙汰し申すまじとて、やがて一人の腰元を媛君に仕立て、瑠理君殊の外に、御所労重し、矢矧へかへらせ給ふとて、左近先に立て乗物舁出さす、是よりさきに郎党ども走りかへりて、かくと告けれバ、長者驚きて帰を遅しと待つけたり、左近が指図にて、御ふしどまで舁入させて、乗物より出給ふハ、姫君ならぬ腰もとなれバ、長者再驚きて、こハ何事ぞ子細あらん、とく〳〵申せといへバ、左近声をひそめて、瑠理君の御行衛しれさせ給はず、御供し給ひしやらん、白糸君もおはせずと申す、長者こたびハ、以の外に驚きて、こハけしからぬ事よ、ふたりともに顔かたち美しけれハ、変化の物の見いれしならん、鬼や喰ひけん、狐やさそひつらん、かゝる為にこそ、小弥太を附置つるに、など早うあなたにて尋ねざる、人々ハあらぬか、西に東に手分せよ、今ハわが家も末とこそなりつれ、いかに〳〵

など、狂気のやうに立さわく、左近しバしとおしとゞめて、御驚きハさる事ながら、わらハとても年ころ仕へ奉り、わが子のやうに育奉りし身なれバ、いかで悲しからぬ事の候べき、さるをさらぬ風情にて候ハ、深き故ある事にて候といふ、常も筋なき事いはぬ左近なれバ、長者あハてたる心をせめておししづめて、とハいかにと問へバ、すべてハわらハが罪にて候なり、男恋しき年頃にならせ給へバ、御心にいらん聟君をと存ぜしに、過にし春の事にて候ひし、御目とまり給へる男ありて、逢せ参らせしかバ、必ず其人の仕わざかと推はかりて候、されバひそかに人つかハして、尋ねさせつれども、たやすくハ影も見せ給はず、あまつさえその男君と申すハ、世の中を忍び給へる、重き人にておハすれバ、此度の扱ひも、却て仕りにくゝ、わざと御病気といひなしてかやうに帰り候ひしなり、よく〳〵物を案したまハゞ、よろしきはかりことも候ハんずといふ、長者聞もあへず、其男の名乗ハ早知りてあり、かならずしもおことが罪にあらず、いつぞや立寄せ給ひし、牛若君にてやおハすらん、源氏の聟君ハわが年来の望にてありき、されど今ハ、大望ある御方とおもへバ、先しらぬ顔してありしなり、美しき御姿といひ、まして弓箭の礼義、骨法天性に得給へる、あつパれなる若君なり、左馬頭殿の

御種にておハせハ、ほしと覚さバ、ゆるさぬまでも、くれよと
こその給ふめれ、さやうに後めたく、盗ミなどハしたまはじ、
さるをひたすらに、其君のとがにして、瑠理君をさへ尋ん
こと、なりがたしと申すハ、心得ぬ事なりといふに、されバ候憚
ある申事なれども、君にハ深き所をバしらせ給はず、さし
当りて六波羅の目代、男衾殿のねめておハす物を、かの人
所望ありしを、殿のいひ遁れ給ひし後も、御別荘の附
付、わらハなどへも度々人遣ハして、ひらにとこそ申せし
が、それのミならず、牛若丸の記念の御笛、瑠理君の吹せ
給ひしを聞しやらん、いかなる人より伝へ給ひし、ねたまし
さよなど申て候、されバ源太夫殿、義朝の君達を詮義の
最中にて、鞍馬の児といひ、かの笛といひ、かた〳〵あやしう
存じての事なるべし、さやうなる折から、瑠理君のかゝる
事おハせしと聞ハ、矢矧の井口こそ、源氏の荷担すれ、牛
若が方へ娘やりしなど、当家をも悪さまに申しなん、瑠
理君、公卿の御筋にてハましませども、御家にかへさせ給ふ
べきやうもなく、まして当時牛若丸の御為にも、よからぬことと
おもひて、さてかくハ仕りしといふ、おことが申所ことハりながら
扨いかにする心ぞと問へバ、左近答へて申けるハ、わらはが
おもひはかり候ハ、さきに申せしやうに、平家のいきほひ
荒涼にて候へハ、よしやかやうの事の候ハぬとても、晴れての
御縁ハ組れ候まじ、されバ禍を福に仕つりかへん計ひハ

瑠理君の病平癒し給はで、失せさせたまひしと披露したまへ、さらバ男衾殿も思ひきりて、且ハ牛若君の御もとへ下し奉らんかた／＼につきて穏便なる、御沙汰にもや候ハんといふ長者聞てげに／＼またなきはからいなりとて、俄かに瑠理君死失給ひしといひ立けれバ家の内のなげきいふばかりなし、長者か心にハ、実に死にたらんよりも、却りてかなしう覚えて、涙ながらゐ□ちさハぎ、瑠理君の遺言なり、死たる姿見くるし、人に見するなとて、別れ惜ミまいらする者をも、ふしどへハいれず、先さしおかれぬ事とて菩提所瑞泉寺の住持をよびて、ありし次第残りなく打語れバ、住持驚ながら、柔和忍辱の身にて、人の障礙とならん事、いかでいひふらし申べき、かたのごとく、引導いたしてんとて、とミ（請）にうけがひたり、やかて着なれたまひし、例の上へハ藤をぬはせ、裾にハ紫を匂ハせし小袖、蝉のからのやうにして、棺にをさめしかし、五体の具のひとつもあらでハとて、落毛のかづらをも入れぬ、此君の常に、髪あげのものに集させ、手づからも拵へ給ひしものにて、髪の長さ九尺計、世に類なくめでたし、それをバ誠に空く、土に埋もせん事よとて、涙こぼさぬものなし、其余ハ人の重さほどの物をとて、古き御調度など入れて、野辺の送り露ばかりも常にかハらず、扨知りたる女ともにハ口堅めし

しらぬ者にハ、猶も打つゝミて、空蝉の葬送なりとハいかなる御仏も、しらせ給ふまじとそ見えたる、かくて長者ミつからも尋、また親しき人にハひそかに打たのミて、こゝかしこさがし求めけれど、手がゝりもあらず、信濃より、吉次の今にかへり上らん帰りにハ、寄るべき約束なれバ、其左右ばかりぞせめての慰めなりとて、歎きあかしてのミそありける、左近ハ懐胎の事をしりたれど、それと申さバ、いとゝ哀しミ給ハんとて、心一ツにおもひ煩ひ、死まほしきよなどまてぞ、くるしがりける、こゝに又壬生の小猿ハ、白糸に逢ひしを、瑠理君よと、おもひ違へし事なれバ、かく死せ給ひしと聞てハ、限りなく打驚きて、又の逢瀬を春ぞとのミおもひ慰めしを、花の嵐に几帳の隔やなかりしとて、足ずりをして歎く、世にありてだに逢がたきを、なくてぞと思ふにハ、恋死といふ文字も、わが身ひとつにそせまれりける、何にまれ忍ひて、墓詣せんとてさしも逞しき心も愚なる様になりて、月のなき夜を幸に、瑞泉寺の裏なる、くね垣より忍び入りぬ、げに無常の世界とハいひなから、梟のから声、森のやうなる木立に聞えて、物凄きことかぎりもあらず、されど年頃さすらへたる人の身にハ、打なれたる事なり、ましておもふ人の墓詣なれバ、天狗や変化のおそろしきも、物の数ならず

狐の跡を追ひ、蜘の囲を仏ひて、卒都婆などの新らしきを見るにも、石の玉垣うるハしう築立たる、長者一家が、墓のかまへとおぼえて、用意しつる松明に火打袋の火をうつして照らし見る、藤原氏の女浄瑠理の墓とハ、法名の傍に顕に彫てあり、朝の紅顔ハ夕の白骨、老少不定のさかひにて、一片の石のミ残りぬるにぞ、蝸牛の角をあらそふ、人間世の塵欲も、さながら厭離しつべし、打見るから目もくれたり、折しも初夜の勤まだ仕果ぬほどにて、鐘のひゞき読経の声、あらしに添つる瀧のつたへ節など、哀れなる事いふべくもなし、やがて阿伽汲来りて持来りし、花手向づゝさま〳〵にかき口説ども、答ふるものとてハ、虫の声のミにて、いと甲斐なし、それさへ鳴よハりて、石菖といふ草の我ひとり顔に生ひ出たり、露のふかさハ、いかで草葉の上のミならん、濡々たる袂重げにおぼえて立んやうもなかりしが、ふとおもひ寄りけるハ、死顔のよきが、天上に生るゝとこそ、大論にもいひつれ、日数たてバ、九相の替やしつらん、またいミしき薬物なと入るれバ、輒すくハかハらすなどもいへバ、何にまれいでや打見んとて、しるしの石をとりて、棺の蓋打あけ、くさ〳〵取りいれし物などミな取のけて見る、かの逢そめし折にも着たりける、濃紫のきぬ、是ハ小袖なるが見ゆれバ、とく引出すくさ〳〵

として屍ハなし、猶底迄もかき探れど、いさゝかの骨だに
残らず、大に驚きあやしミて、こハいかなる事ぞや、これや
仙人の種にて、なきからの生出て、天にもや登り行けん、よも
さる事ハあらじとて、猶さぐり見るに、いと長ながき、かづら
はかりぞありける、屍なき事ハせんかたなし、まだ世にな
がらへてあるやらん、まづ何にまれ小袖鬘の二品、かたミに
せん、うなひ松ともおもふ縫紋の藤もつき〳〵しとて、持て
かへらんとする、折から、墓所の奥に乞食の小屋ありしが、
ひとりの乞食出来り、あかしのさすこそあやしけれ、いで
〳〵曲者ごさんなれとて、ありあふ棒もて打かゝるを、あ
ら小さかしとて、ひらりとくゞれバ、乞食ハ打損して、己が
力のあまりつゝ、柩のきはによろめく所を、小猿ハ早くも
後へまハりて、突倒せバ、乞食ハおもハずも、柩の中へどう
ど落入ぬ、小猿手早く蓋打のせて、木偶のやうなるおのれ
がさまかな、柩の留守せよ生人形、亡師の宿祢ハ我な
りけりと、歎きの中にも打笑つゝ、息の音今ぞ留らせ
てんとて、しるしの石をもとのやうにすえ置て、かき消す
やうにぞ帰りける、後に聞くにかの乞食が泣よバふ声
のもれ聞えけれバ、墓守の法師なと来て取出して、助
てやりけるに、乞食男ハ屍のなきこと語るに、ミな〳〵不
審におもひて、住持に問に、それハ前世の果報いミじくて、
死骸を此世にとゞめず、仏となりつるなり、めつらしからぬ

事なり、されどその事を、凡俗の人の沙汰せんにハ、罰のあることぞと、おどせバ、ミな〳〵信とおもひつゝ、おそれて語る事なしされバ小猿が墓剥し事も、世にハしれる者もなし、此住持長者に契りし詞を違へぬなるべし、今の世に、西矢矧の畠中に、浄瑠理姫の塚とて、残るハ爰にや、又誓願寺といふ浄土寺に、牛若と瑠理君の像ありといふ、是ハかの人形を模して作りしなるべし、はた好事の者の作りたる物にやいぶかし、されバ右の二所の内、瑞泉寺の古跡ハいづれなるか詳かならず

○川辺の菊

浅生の松若ハ、過にし雨風の夜に、非道の事ふるまひしに瑠理君の御腹より、光物の出しにおどろき、貉弁次、狼小十を引つれ、かの明家をのがれ出しが、雨風の道を歩ミなやミて、ひとり〳〵になり、松若ハ辻堂をもとめていこひ居りぬ、さすが松若ハ心きゝたる悪党にて、夜の明方、雨のやミしを幸ひ、また明家へ忍び入り、瑠理君の途中、御用意の金もうばひとり、それにても飽たらず、瑠理君の死骸の小袖引ばがんとせしに、表に人音すれバ、獺寝川の流こそよけれ、かしこにて血の着たるものを、洗ひそゝがんとて、其まゝ抱き出て、川岸へ行し折から、それをも見付られて、引組たる果々にハ、死骸をハ誤りて川へ落し、我身やう〳〵にまぬかれぬ、くやしとおもひ

つれど、かゝりし後ハ、伊勢三郎がおそろしくて、上野にハ
足も留られねバ、駿河の国にぞ落行ける、蒼蝿のおのれ
とむれ来るやうに貉も狼もまた、白糸を売らせし、
二人の盗人も尋ね集りて、吉原の辺にかくれ住て、ある
時ハ山だちをし、あるときハ蔵の壁をうかゞひなどして、
世をわたりけるに、九月の初ミなこぞり寄ける時に狼小十
したり顔にすゝミ出て、おのれこそいミじき事聞出しつ、
菊川の辺にすめる百姓、千両ばかり持て来し、娵を向へ
つるとか、いざ今宵それが家に忍び入て、其金得物に
して、快よく酒打のまんずるハいかにといへバ、松若大に悦
此ほど絶て金の蔓のなかりしを、よき事こそ注進し
つれとて、其日の暮るゝを待居たるに、計略いまだ半に
して、暮れかゝれバ、秋とハいへどあまりに短かき事なり、さ
ハいへばや打立んとて、とく手配を極め、裏道づたひに
菊川へぞ行ける、かの百姓の家、こよひハ早寝たるやう
なれバ、心安しとて五人の者ども、人まぜもせず、奥なる
蔵を目につけて、やう〳〵に鎖を捻きれバ、われさき
にと入て見るに、透間もなく石を鋪て、坐敷のやうに
広きばかり、たゞ一ッの道具もなき空倉なり、空庫に
鎖おろすべきいはれなし、おもふにも似ぬ事ぞ、いで
外の倉へとて、出んとすれバ、鎖はしのやうにとざして
出られず、こハけしからず、計に落入て、生捕れん、無

念さよといふに、こなたへ来よといふ声すれバ、ミな〳〵怪しミてあれ聞給へとて、耳とゞむれバ、地の中よりふたゝび呼ぶ声す、いとしハがれたる声、敷つめたる石に響て聞ゆ、よく〳〵見るに、石と石との間よりあかりのさせバ、あやしミながら、遁るゝ道もやあるとて、石をとりのくるに、石ハ穴蔵の蓋にて、下に燈火あり、扨ハ明たる蔵と見せて、穴蔵へ金たくハへて、神へ御あかし奉しならん、ミな這入よとて、階子めかせし坂を下てミれバ、黒き頭巾に、熊の皮の道服着て、燈火かきたてつ、兵書を読をる人あり、よく見れバ、松若等が頭と仰たりし、熊坂張樊なり、松若大に驚きて、討れ給ひし君の、いかで、爰におはすぞと問へハ、残りの人々ハ、扨ハ地獄へ来りしかとて驚く、熊坂につこと打笑て、此所全たく地獄にあらず、われ身を脱かるゝの術を知りたれバ、命恙なくて爰に閉篭て居、御辺等ハ、盗人といふ名計にて、到りての小盗人なり、いかでか我大量をしらんといふ、松若も人々も、扨も〳〵とて感服するに、熊坂またいひけるゝ、かゝる穴の中の闇がりにてハ、たま〳〵なる客人に、いさゝかの饗應もなりがたし、こなたへ来給へとて立バ、ミな尻につきて行く、穴の中とハいへど、畳しきて広き座敷なり、やがて隅なるふすま明れバ、二三段の階子あり、上へ登り見れバ、こハいかに、障子へうつる日影

あざやかにて、夜中とおもひしハ昼中にて、清らかなる出
居めきたる坐敷なり、ミな〳〵ふたゝび驚けバ、熊坂又
笑ひて、さのミ驚く事なかるべし、日の暮れしやうに思
ハせ、此蔵の鎖明しなどの事ハ、ミなあらぬ事にて、誠は
われ、縁の行者が、悪魔を捕ふる術を伝ハりて、御辺等を
索にて、釣りて引寄せしなり、各腰を見よといふ、かへりミ
れバ、げに鉄の索つきて、すべて五筋の本ハ、床の上へに
飾り置たり、作りものゝ黒き猫の首縄につなぎてあり、
人々試ミに身を動かせど、盤石のやうにていさゝかも動
かず、人々例の驚く、熊坂いへらく今ハそのくさり何にか
せん、解きてよといへバ、鉄の索おのれととけて、巻子様に
巻集りぬ、いざ打解たまへ、そこの障子あけよといへば
明て見るに、縁を隔てゝ二間ばかりに、清き流れあり、菊の
花左右の岸に咲ミちて、けしきいはんかたなし、熊坂指
ざして、あれ見給へ、是ぞ菊川の菊なるが、わが土かひの
養ひも加ハりしぞ、よきながめにあらずやとて、いと誇
かなりミな〳〵打ながめ、菊川の名にあふ菊なりとも
たゞにハいかで、かやうに見ばへの仕るべき、且ハ御住家の
よきに、□るなるべしとて、ほめたつれハ、ほめたまひし
うれしさに、いで菊の酒のませまいらせんとて、酒壺
持来りて、をのれも飲人々にも飲するに味ひまことに旨
けれハ、人々是をも称美してのむ熊坂またいひけるハ

おことら、爰を菊川とのミおもふか、酒の味ハひも、つね
ならずおもふべし、こゝハ仙家にして、われハ仙人になり
たるぞよ、しかし凡俗の折盗人をせしかバ、昔忍バしく
汝たちよ問事あり、事新しけれども、盗人にも五常の
道あること、おぼえてあるかといへバ、松若いかで忘れ候べき、
宝の有無時の善悪をわきまへしるか、智と申へく、入る
ときハ先に進ミ、出る度におくれて退りぞく、勇とこそ
申すなれ、扨あまねく手下の者に施こすハ仁にして、分
に甲乙のあらぬハ義なり、主将といへども手下を侮
らず、礼と申すべからん、此五ツの物をしらで、大盗をせん
ものハ、天の下に候ハじといふ、熊坂聞てよくも忘れざりし、
さらバ義を守る御辺たちに、わが蓄のもののわかち与へん
ずとて、かたへのふすま押あくれバ、何万両とも数しれぬ
ばかり、黄金いれたる箱、目にあまるばかり、うつだかうつミ
あげたり、金見てハ笑壺に入るが、盗人のならひにて、
御用意の程、あへて及ぶ所に候ハずなど、追従いひて分
くるゝを待たるに、熊坂たゞ一両つゝの包ミ取り出て
やれバ、ミな〳〵あきれて、大量とおもひしに、年の数そ
ひてハ、物惜ミする人にぞなられしとおもふ、されど
まつうれしといふ、狼小十よからぬ中にも、よからぬ心
つきて、松若に目くバせすれバ、熊坂はやく悟りて、汝
われを殺して、此金ども奪ハんとおもふならん、首ハ

金より大事の物なれども、たまさかにての見参なれバ、
引出物に取らせんぞと、いひもあへぬに其首、おのれ
とぬけ出て、向ひなる長柩の上にあがりて、から〳〵と
わらひながら、客人五人なるに、首一ツにてハ不足なり、それ
見よといひつゝ、其首さつと消てなくなれバ、五人の前
にありし黄金、残らず熊坂が首に化したり、見るが内に
ひとつに集れバ、またもとの大なる首となりぬ、人々
以の外におとろけバ、かの首なき骸動き出て、熊の皮の
道服ぬき捨れバ、おどろの雪をいたゞきし翁、のどや
かに座してあり、松若したゝかものなれバ、我等を妖
怪の悩ますならん、悪くひしわざ、切てくれんずとて、
太刀引ぬかんとするに、漆にて堅めたるやうにてぬけず、
さらバ打ひしぎとて、とびかゝらんとすれバ、五人の手足
ぐた〳〵として、骨なきやうに力出ず、その時翁しづかに
いひけるハ、我を何人とかおもふ、鞍馬寺に居りて、牛若
丸に兵道を授けし、僧正坊快舜が変ぜし姿なり、
仙術にて形をかふるハ、掌をかへすがごとし、汝ハ凡界の
わる者、我ハ仙界の行者なり、いかに手向すとも、叶べき
わざかハ、俗塵を離れし仙家の酒宴に、釼の舞せんハ
無骨なる業なり、いざ無道人に語りて聞せん、われ
つら〳〵熊坂が悪逆をにくミ、すでに殺させつれども、
猶つながれる悪人の汝等に、因果の道理しらせんとて

仮に熊坂が像になりて、汝等を試ミつるなり、見よ汝等
かごとき人非人ハ、宝を見てハ義理をも忘却し、故主め
きし、熊坂をも殺さんとハせずや、誠に人面獣心にて
億万劫をふるとも、修羅道を出離せざらん、なま中に
盗人にも、五常ありといへりし、盗跖が詞を信じて、しかも
其盗人の五常をだに守らず、そも〳〵人の心の善悪
ハ、水にうつらふ面のごとく、明白にしてさらに〳〵、あら
そふべからす、今此盃に酒をたゝへて鏡となし、さて
喉へ入れなバ、心の善悪も自然にうつりぬべしとて、
盃とり出てあたへ給ふ、折ふし酌する童子なし、霊猫
きたれとの給へバ、床にありて作りものとのミおもひし
猫、人のやうに立て来つ、ミな〳〵大きに驚きつゝ、松
若まづ、其盃を取りあぐるに、玉の盃ならす、ひとつの
髑髏なり、酌する猫を見れバ、変じてひとつの人形と
なる、わが殺しつる、浄瑠理媛の像なれハ、悪人に名
たゝりし松若も、此時ハあきれにあきれぬ、人々ハまして
目口あいたるばかりなり、誠にわが身人形のやうにて、
おもはずも、手にとりたる白骨を打落して、うつむけ
バ、残りの者ハあるひハわなゝき、あるひハ氷のように、かた
まり居たり、僧正坊詞を正しうしての給へるハ、事長
けれどもよく聞よ、まづ此白骨ハ、もと加賀の国の住
人、富樫の兵衛太夫が娘の濱夕といひし者のなれる

果なり、おもひそ出るひとむかし、熊坂入道か三之助と
いひて、加賀国にありし時、濱ゆふかれが為に勾引され、
つゐにハ都へのほりしが、歎の渕瀬かはらぬを見て、加茂
川へ身を投てうせぬ、其折宝とおもいし、鏡も奪れ
ぬされバ、天道道理にあらで、死せしを哀れそたまひ、
ふたゝび生れ出させ給ふ、それそ浄瑠理媛なれバ、鏡も
仏の御力にて奪ひ返し、矢矧の家の庭中より掘出
させたり、さて縁者たる牛若を以て、熊坂をハ討取せ
たり、されど生れ出がたき人の生れ出たれバ、一たびハ
からき目をも見るべし、それにつきておもひつゝくるに
汝等此世にて、悪逆すべき業因あり、留めて留まる
べきにあらず、されバ其業をほろぼさんとて浄瑠理媛
勾引し出させつ、しかるに薬師如来の、のたまひけるやうハ、
浄瑠理媛ハ、からき目に合するばかり、命を召べき道理
なしとて、おもひめぐらし給ひ、浄瑠理媛の像、牛若丸が
箱にいれて、伊勢の三郎が許に残し置つれバ、それを
幸ひに、人間のやうに見せたまひ、物いはせ給ふにハ前
生の白骨を、加茂川より取り得て、腹の中へいれたまひ、
汝松若らと問答なさしめ給ふ、そのゝちありし紙画ハ
かの妹の白糸といふが、下画に書て、人形にそへてありし
ものなり、北南といふ歌ハ、如来の御歌にて、よしや人形ハ
流れに沈ミぬとも、藤原の末ハ沈め給ふましき、御誓

願なり、その人形や白骨の、いかにして爰にあるぞと云にそも仙境といふ物、別の世界にあらず、いづくにもあり、凡夫に見えぬ物にて、菊川とおもひしが、菊川にあらずして、さて仙境ぞとおもへと、猶人形流れにし、獺寝川にてぞある、我人形をこゝにとゝめ置つれバ、持仏堂の白骨も、慕ひ来りしぞとの給ふ、よく〳〵見れバ、さばかり多かりし、菊の一本もなくて、木たちの有さま見覚へたる所あるハ、げに上野の国なり、悪党ども誠におそれをのゝき、前非をくやミて、手をすりて命を乞に、僧正坊の給ひけるハ、おのれらが此たひの所行ハ、誠に浄瑠理を殺しつるにあらねど、青墓の後も過を改めす、源太夫にかたらハる、其志しにくむべし、まして多年積悪の罪ハ、かりそめの懺悔にて、あへてつぐなふべくもあらず、此故に我ハ赦さんとおもふとも、天道の御心はかりがたし、汝等まづ此まゝこの盃にて、今生にての酒もりせよとの給ふ、仰のまゝにせバ、もしも命助かる事もとて、おづ〳〵順にうけてのむ此酒はじめ飲し酒にかハらず、同じ仙家のものながら、盗人どもの此たひのめるにハ、瑠理君の人形にのませし、堕胎の薬の様なり、吐バ呵られんとて、苦しながらのむ、僧正またのたまへる、我かやうに汝等を驚かすハ、念入たる教訓のやうなれども、悪逆無道の計も、神仏の助、仙界奇妙の術にハ

更に〳〵及ばぬ事をしらしめてハ汝等が未来
に生れ出て、世の常の人に「（破）　（損）」事をおもふ、いミじ
き慈悲心なるぞよ、今ハ「（破）　（損）」へ出よとの給へば、
ふすまの陰より這出ぬ、此正門坊こそ、牛若丸に大
事をすゝめ、そのゝち僧正の兵書をさつけたまひし
夜、戌亥の杉のもとに、待てありし者なりけれ、今ハ僧
正坊に近く仕へてありしが、よバれてこゝにハ出つるなり、
僧正、正門坊にむかひての給ひけるハ、鞍馬山より此上野
まで、はる〳〵の道なれども、またゝくうちに汝をつれ
来りて、かゝるていたらくを見せつるハ、汝に猶も命ず
べき事のあれバなり、浄瑠理媛さきにハ、殺されざりし
かども、まことに危きに逢ふ事あらん、それも仏の御力
にて身に恙なかるべし、其時浄瑠理媛が、方人の者に
逢ハん汝に常にいひ含めし、幽冥未来の事、其人にも
いひきかせよとて、又ひとつの酒壺を取出たまひ、是も
汝持てあれ、同し仙家の酒にて、悪人にハ毒となり、善人
にハ薬となる、用ふる折あるへし、又人形をバ、三郎がも
とに残しある、箱の中に、濱ゆふが白骨ともにかへし
置べし、それも心得てあれとの給ふ、正門坊うけ給りて、
かへす〳〵悦び申、さらバかれらが息あるほど、降魔の
たけき姿、見せんずるハとのたまへバ、今まで翁と見え
たまひし僧正坊、たちまちに二丈はかりの大の法師に

なりたまひ、鼻高く眼するどう、ゆさ〳〵と山のやう□
ゆるき出給ふ、今の世に天狗とて、画ける姿ハ是に
てやあらん、盗人どもハおそろしくて、今ハ誠に見
あぐる事あたはず、其内に酔まけて、ミなうつぶし
倒れけれバ、僧正見給ひてさもあらんとて、ひとり〳〵
とりて酒いれし、壺の明たるに入れ給ふ、此壺わづか
に、三升ばかり入らんとミゆる、大きさなれども、五人の
者の体、荼よりも小さくなりて、たやすくつまミ入れ
られぬ、扨の給ひけるハ、此酒に酔事、仙界にてしバし（暫）
の間なれども、俗界の内にハ、百日を経てさめぬべし、
汝正門坊も、かの所へ到らんにもまだ早し、よき折
を教へてん、まづ我にしたがひて、例の鞍馬山に行てあれ
とて、五人の者いれし壺を左りの袖にいれ給ふ、正門
坊ハ、酒壺もちながら、例のやうに右の御袖にいれバ、僧
正羽扇をとりて、いでとの給ふに、左右の御袖翼のやう
になりて、大空へかけりてぞ行給ふ、されど此事、獺寝川
の川辺の事ながら、凡界にハあへて知る人なかりしとぞ

○嫗が宿

是ハ信濃の国の事なり、姨捨山の麓に、近き頃移り住
たる嫗ありけり、頭に黒き筋少なくなりて、名所にハ
居ながら、月にも花にもすてられたり、種根と申ハ、平
親王将門に与力せし、伊豫の海賊純友が筋の者にて

おのづから心たけ〳〵しきかたなれハ、まして親の親とだに、哀れにも戯にもいひかゝる人なし、生れハ加賀の国にて、父もさるべき武士なりしかど、落ぶれし後、はかなき夫を持し時、村長弥惣次が家に仕へて、乳母をぞしけるそのゝち夫におくれ、中国あたりまでもさすらへありしに、風の伝にきけバ、当時盗人の張本と聞えし熊坂張樊ハ嫗が乳にて育ちし、三之助也と聞くに、よの常の人ならバ、あさましき事とて悲むべきを、嫗ハ却りて打よろこび、我乳を参らせしかハ、さもあるべし、大平の御世の姦賊も、静ならぬ折にハ英雄なりとこそきけ、さらでハ一天四海に名を揚ん事も難かるべしなどいひて、熊坂が住家をも、訪ハやと思ひしが、さハる事どもありて、年月移りかはりぬ、かゝるへしとハおもひきや、ことしの春美濃国、青墓にて牛若丸の為に、熊坂討れしと聞くに、こたびハかなしさたとへんかたなく、せめてハ其頭なりとも奪ひ来て跡とはんとおもひてぞ打たちける、かゝる逞ましき者なれバ、其寡住のなりハひといふハ、堕胎の薬を売て、それにつきてハ、ミめよき女を勾引し、あるひハ子をおろさせて後、是をけいせいに売りて、あまたの得分をなしけるとぞ、かくて乞食にさまを替へて青墓にいたり、梟されし首ともを奪ひてひとつ〳〵見れど、夏の事なれバ爛れ

くされて、それかあらぬか、顔立さらに見わくべうもあらず、持かへるべきやうもなし、うたれし事ハ一定なれバ、さらバ敵の、牛若丸にしのびよりて、一太刀怨んものをとおもふに、木曽とも都とも、また矢矧ともいひて、おはす所慥ならぬに、木曽路にて白糸を売たる盗人逢たり、かの者ハわろ者の同類とて、嫗を知たれバ、これ牛若丸が、重宝の器なりとて、かの横笛を見す、是ハ白糸が持出しをとられしなり、嫗ハ此笛持てあらバ、牛若丸に近寄手だてにもならんかとて、物にかへて買置けり、かくて此姨捨にハ、すミながら昔のことハ打かはりたる、女性にてぞありける、こゝにまた男衾源太夫ハ、横笛を盗ませ、恋の叶はぬ遺恨にハ、かの児捕へて、吟味せばやとおもふに、頼ミし松若がいふやう、横笛のありどころしれ候ハず、但し姫をハ奪ひて奉らんといふに、嬉しくて待てありけるに、都よりおなし役の目代、信濃に下るものありて、六波羅の御下知なり、和殿も共に参給へといふ、信濃の事も、取りいそぐ事なれバ、さだかならぬ、牛若丸の事いふ間もなくて、やがて信濃へ下りけり、かくて神無月になりぬ、ある日雪催ひの空なるに、その目代男に、要事ありて行く、雪いさゝかふり来ぬ、いとゝ寒さの堪がたきに、跡の方よりやう〳〵をう〳〵とて、さすがなまめきたる声にて、息も絶げによぶもの

あり、おのれを呼かとて、ふりむきて見れバ、さなりとて、寄り来る人を見れバ、うつくしきのミならず、やごとなき上臈姿なり、かゝる田舎にハ、祭りなどの頃にだに、見ぬものなれバ、是こそ例のしや狐ごさんなれとて、身がまへするに、あなかたハ、更にさやうのものにてハ候ハず、わらハゝ盗人に勾引されし者なり、わろ者の油断を見て、やう〳〵に遁れ来てハ候へども、道はしらず、雪さへふり来れバ、苦しさあハたゝしさ、やる方なし、殿仏心に憐ミ給ひて、いかで三河の国へゆくべき道、教てたべと手をすりていふ、着たる物を見れハ、むらさき裾濃の小袖に、上にハ藤を縫にしたるなり、三河といふ文字の耳にとまり、小袖の紋がらもあやしけれバ、もしハ浄瑠理媛にや、風の便りに死にしと聞しハ、ひが耳なるべしとおもふに、いよ〳〵美しく思ふ、飢たる虎に、折よき得物なり、狐なりともあれが姿に化たらんを、遁さんハ口をしとて、さらぬだに女に逢てハ、正体なき源太夫、心ハ笑壺に入れども、まづさらぬ顔して、扨ハいたハしき御事なり、しかし笑止の御申やうぞ、三河の国といふハ、是よりハあまたの国を越て、ゆき候ものを、輿にものらせたまハで、さやうのなよゝかなる、大君すがたにて、何条ゆきつき給ハんといふ、かのげにとおもひたるさまながら、さりとて今はたすべきやうも候ハ

す、君に逢ひたてまつりたるが、他生の縁にこそ候はめ、助給へよとて、泪ながら袂にすかりて放たす、藤の花の、けしからぬ木に、咲まとふハ、いとあやしけにおもハる、源太夫おもふに此娘、我を嫌へるものなれど、かうさすらへては、窮猿の木をゑらまぬ道理にて、さそふ水あらでのこゝろなるべし、よし〳〵と心の笑ミも、ほにあらハれて、我も要事ある身なれど、和君のかく、くるしがりたまへるを見捨んは、情なし、あすの夜ハともかうも、今宵ハ我、よろしき宿もとめて参らせんといへバ、女ハ例の手をあはせておがむ、さて女の手をとるに、品々しき事かぎりなく、袖の内にて握あひなどすれバ、源太夫が心酔へるやうになりて、忽ちにかの要事をも打すてゝ、道をかえて行く、ゆく所ハ姨捨の嫗が許なり、嫗と源太夫とハ、古き交にもあらねど、源太夫を欺ひて、金うりなどして、おもてにハ尊とミて、まじハるなり、此とき嫗ハ雪げなれバ、垣のあたりに置し、薪など取り入れて、竈の火焚てをりしに、源太夫娘をつれて来れバ、とミに出迎へ、例の笑顔つくりて、かゝる雪の日によくてぞおはし給ひたれとて、かの女を見て、まして都上臈を伴ひ給へり、さぞ凍え給ふらん、いざこなたへとて一間にむかへいれ、例の挨拶して、扨女君ハいかなる方ぞと問へは、源太夫偽りて、これハ都なる、おのれが友だちの娘なるか、男を恋て、おのれが許に来しなりといふ、女をあきなふ

嫗よき雛取の、糯縄にかゝりつるぞ、静かに欺かん物をと
おもへバ、いよ〳〵殊勝げにもてなして、さても〳〵遥かなる
所を、男にうかれて下らせ給へるハ、世にめつらしき真
実なる御心なりとて、心にもなき追従いへバ、女ハいと恥ぢて
のミをり、嫗また雪のふるにハ、ふたりともに、宿りたまはん
御心かといへバ、源太夫よくも推察せり、げにさなりけふ道
にて逢しか、おのれが家ハ人げ近けれバ、嫗が家借らん
ためなりといふを、嫗聞ていと安き事なり、心おかずにお
ハせ、まづ此寒さ、凌がせ給ふばかりに、濁れる酒だに参ら
せんとて、あたゝめて干魚そへて出しつ、扨都の客人にも
何がなとおもへど、外にまゐらすべきものなけれバ、雪のい
たう降ぬうち、大根ねぶかにても、とり来てまいらせん、折
わろくつかふ男の佐多も、きのふより出て、まだかへらねバ、
おのれミづからとりてこん、しばしの程いとまたまへとて、
出てゆく、源太夫女とたゞさし向ひてをり、女すこし酔ひ
たるさまにて、源太夫によりそひ、呑さしたる盃をさし
つけて、おほくハたべ候ハぬに、酔て苦し、殿此なかバのミて
たまへといふ、おもふ所のうれしけれバ、仰ありがたしとて
飲ほせバ、女酔さますにハ、雪風こそよからめといひつゝ立
て、奥なる窓のもとに行、源太の君爰へおハして詠め給へ、
まめやかに降りつもりたる、山々の雪げしき、画にかきた
らんやうにて、あな面白やといへバ、源太夫そゞろ心に成り

て立ていく、女源太が肩に手をかけながら、いとおもはゆげに殿よ殿、わらハがおもふ事あり聞てたび給はんやといひさま、見おこせたる目つき、いとなまめけバ、源太が心いよ〳〵ときめき、たるを、しひておししづめ、何事にぞそも三河といひしが、もしハ矢矧のわたりならずやといへバ、女顔あからめて、いといひ兼たりしが、やゝありて弓とりの御身なれバ、矢矧かといはせ給ふか、何にまれよるこそまされにて候へバ、其本末の事ども、寝物がたりにて申さん、もとよりしらぬ人の、物まふすべきいはれ候ハず、されどしらぬ国にさまよひ来たれバ、打つけに名のりせんハ、恥かしともはづかし、殿にハ定まりたる御妻あらんずれバ、申さんもいかゞなれど、わらハをかう、憐れがり給ふ御心をたゆめ給はば、此嫗が所にすえをきて給へ、あバらやのやうなれど、人ばなれてあれば、さてながうそひまいらせたらんにハ、いかばかりか嬉しかるべきといふ、女にかくいはるゝは、源太夫が生れ出てこなたのこひ事なれバ、魂大空に飛かける心地して、骨だちたるからだもなへ〳〵となり、あな〳〵さやうの有がたき御詞こそ、却て身にふさハず、罰も当らんやうにぞんずれ、の給ふごとく本妻ハ、都に残しをきたれど、それハ土とも灰ともならバなれ、和君とこゝにて逢初んからハ、偕老の契むすびて、生たらんほどハ、西方の都をも、ふたゝび顧ミ候ハじとて、すぐに

もと、おもふふせいなれバ、女しバし待せたまへ、日もまた暮はてず、後にあの庇の間にて逢参らせん、今ハ人参来なんといふ、案のごとく人かげのするハ、嫗ならで下男の佐多がかへりしなり、二人ハあたら間をとおもひながら、もとの所にかへりてをれバ、佐多下郎なれども、小ざかしきやつにて、源太夫を見ていひけるハ、雪をもいとはでおハしゝハ、天晴都人のやさしき所よ、おのれも田舎にハ住候へど、猿の人まねびに、せめて囲碁だにとて、けふも囲ミをりしかバ、嫗どのに呵られて候なり、一家のあるしこそ羨ましく候へ、但さきの程、殿と同じやうの人、北の小路にて、殿をこそ尋ね候ひしかといふ、源太夫心付てさてハ同役の男なるべし、けふいかざりしかバ尋ねつるならん、あやにくなりとて立てバ、女も残り多げに送りて、耳に口あてゝいひけるハ、男女の道に、晴ての仕業ハ面白も候ハじ、今宵ハまづ嫗に忍び給へ、あの東の庇の間にて、逢ひ参らせんといふ、源太夫ハまして口をしげに、ふりかえりつゝ出て行きぬ、佐多ハ見ぬさまながら、女の顔を目とめりて、君にハ色めき給ふ御心から、かゝる所に来り給ひ、今宵ハ嫗が娘のやうにてゐ給ふ、情々しき御方かなといふ、女おことにハいかで知りたるぞといへバ、さん候此ころ、隣村に追分の宿の、旅篭屋まいりをりて、そこにをのれも碁を囲ミてをりしに、さきのほど嫗お

のれを尋ねなから来て、君の事かたり申たれ、しりて候といふ、扨ハかの嫗われをけいせひに売らん心あるかと驚きて、長居しがたしとおもふけしきなるが、佐多にむかひて、雪いよ〳〵ふり来りぬ、嫗のぬしもまたかへり給はず、門の戸しめて来よといひつけ、燈女が側にさしよりて、など強顔ておハすぞといへどハらへもせず、などやさやうに恥らひ給ふぞといふに、女戯ふれことをバせぬ物よといへバ、佐多いな戯ふれにてハ候ハず、さらバ誠のあるしるし申さん、今嫗の物語を聞て、打おかずかえり来て見れバ、源太夫殿とむつまじき御酒宴なり、それにてハおのれが心のほど申がたく、欺きて帰へしたるほどの、真実なるものなり、かく見初参らせてハ、更に打やめん方も候ハず、つら〳〵おもひくらべ、源太の老ぼけ人よりも、某か若やかなるハ、夜の戦かひにも、そのほこさきするとく候ハんとて、手をとれバ女ハ、かハゆらしきけしき引かへて、源太夫殿にもおもハれたる身なり、またたとひ嫗が娘になり果るとも、おのが主にてハあらぬか、尾篭なるぞといひさま、佐多が手をとり捻あくるに、力飽まで強くて、放さんとすれども放ちがたし、佐多案に相違

して、まことに戯ふれごとなり、ゆるさせ給へといへバ、女うち
笑ながら、都にハ育てど、おことがやうなる、痩腕に負く
べきか、女とのミあなどるな、しかし源太殿におもはれ参
らすれど、無骨なる男にて、添果んともおもはず、まこと
ハおことがやうなる、若男をこそ願ハしけれ、ましてお
こと実ありて、今わらハが問事いひ聞せなバ、わらハ
とても岩木あらねバ、いかておことがいふこと聞さらん
又いはさらんにハ、おことを引くゝりてありまゝに源太殿
に訴へぬべし、問ふ事といふハ、あるしの嫗わらハをバいかゞ
するか、おことか知りたる程の事いへといふ、佐多ハおそろ
しくも、また嬉しくもありて、和君ハこよひ追分の宿
にうられ給ふべしといふ、とハいかで知りき、いかなること
ぞと、せめて問へバ、されバ候追分の旅篭屋に、五十両に
売べしと、かたらひあはせて、今の程酒のミてあるなら
ん、外の事ハしり候ハず、今ハゆるし給へといふに、女なを
ゆるさず、また問事あり、あるしの嫗いミじき宝と聞へ
たる、横笛持たりといふがまことかと問バ、げにそれも知て
候といふ、さらバとてゆるせバ、佐多痛める手を撫ながら、
扨々いミじき御力におはすとて、追従いひつゝ恐し
ながら、其顔立を見るに猶なまめかし、女しバし打
案じたりしが、さ聞ん上ハこゝにハをらじ、さりとて源
太男にハわれ心なし、今よりおことと夫婦にならん間、

いよ〳〵志厚からんにハ、爰をつれて出てたべといへバ、佐多うれしさ限りなくて、さやうの御心ならバ、虎臥のべもいとハで、伴ひ申べしといふ、女しすましつとおもひて、またいひけるハ、まことハあの笛といふハ、源太殿より、わらハが父君の預りたるを此嫗に盗まれたれバ、源太殿其代りに、わらハを妾にするとて、連れられたり、されバ其笛返さゞらん内に、わらハも身を隠さんにハ、源太夫殿に讎まれて、親たちハ憂目を見おことも、わらハも近国にハすまひがたし、されバそれ返さんとおもへバ、後の程までにひまを見合せ、盗ミくれよといふ色好の佐多、女の詞をバ何いなむべき、うけたまハりぬ、今とりて来てまいらせんといふに、折ふし嫗かへり来て門たゝけバ、女声をひそめて、逢んにも、笛奪ハんにも、折わろしわらハ東の間に寝てあらん間、四の鐘鳴るころ、裏よりしのひこよ、しかし燈火ありてハあやしまれん、闇にて待てあらん、わらハが袖長き小袖こそ目じるしなれ、扨笛をバうばいて、すぐに源太とのにかへしてよ、わらハミづから返さバ、源太殿あだめきたることを、うるさくいひかゝりなん、源太殿ハ後に、西の庇にふさせぬる約束に欺きたれハ、おこと奪ひ得て後西の間に持行てよ、そこにも燈火あるまじければ、屏風にかけある、肩衣の袂に入れおくべし、ただし上包に

源太の主に、矢矧よりとしるしてよと、つぶさに教へ
ゐたり、此肩衣といふ物ハ、今の世にいふ羽織のやう
なる物にやあらん、扨門叩て嫗源太夫と、道にて
逢ひつれ立て帰り来たりぬ、佐多ハ源太を欺き
て帰せしかバ、事がらあしく、且ハ女にあふかうれし
さに、湯あミし髪ゆひてんとて、かれが友だちの所へ、
裏口より出て行く、女立て門を明れバ、二人ながら
入りぬ、嫗ハ佐多が居ぬを見て、またいつ地へゆき
つらん、さミしうおはしたらんといへバ、源太バしやつ
怨ミもなきに、我を欺きつとて、佐多が〳〵といひ
のゝしる、嫗また女に向ひて、おのれ大根買に参りしに、
隣村の惣太が妻、夫の留守に子産むとて、くるし
かると聞けバ、おのれ見扱をりて、大にひまどりしなり、
しかしかえり路に、源太君に逢奉りたれバ、打つれ
て帰り候ひぬ、看病せし代りとて、味噌につけたる鯛
をくれ候へバ大根などにくらべられぬ品、ふたりに参
らすべく、けがさでもちて参りしといふ、是にてふた
りにも、夕げしたゝめさせ、扨日もくれぬれバ、ね給へ
といふ、時に源太夫契約の事なれバ、東なる庇しの
間にねんといふ、嫗いかにとも覚すまゝにとて、やがて源
太夫をやりて、ふさせつ女□□ざとこゝに寝んといへ
ハ、嫗ハ端近くてあるこそ、よろづ仕よけれとおもふ、

ミなしづまりぬ、すでに亥の刻にもならんと思ふ頃
醴あきなふもののこゑするに、嫗ハ追分の旅篭屋を待
てあれバ、醴かひながら門の方へ起てゆく、女も起て源
太が閨へいく、源太夫ハ待ハびしさまなり、女かの紫の
上きぬをハ、手に持て来りしが、さぞや待遠におハ
したらん、嫗目さめがちなれバ、ためらいて参らざり
きゆるさせ給へ和君、下のきぬばかりにてふし給はんは、
寒くおハせん、これ奉らんとて、衣出してきす、そのう
つり香のなつかしさに、源太打ゑミながら、打合ぬ装
束仕りてんといへバ、女もほゝ笑ミながら着せて、扨わら
ハはまた男になりて見ん、君が衣服かし給へとて、ぬぎ
おきし上のきぬを着、肩衣をも着て、いうに似合て候ひ
しかなと笑らふ、源太夫ハとくいねよとて、心せくにま
たせ給へ、ともし火ありてハ恥かしとて、吹消ししが、口そ
そぎて参りこん、今しばしいとま給へとて、そこを出て
西の庇の間に入りぬ、こゝにまた下男の佐多ハ、案内
ハよく知つたり、裏口より忍び入りて、いかにしなしけん、
やう／＼に、横笛うばひて立出しが、はや四ッの鐘なり
ぬ、源太夫がふしどへ教へられし、西の庇の間へ笛もち
てゆけバ、いひしやうに燈火なくて、よく寝入たるやうに
音もせねバ、猶もしのびて、是も教へのまゝに、屏風にかけ
かけある肩衣をさぐり、袂に笛入れ置て、ひそかに出て

さらバ女の所へ忍バんと東の庇の間へいきぬ、まことは源太夫、東の間に寝てあり、うがひすといひし女まだ来ず、厠に行たるにや、扨もながしとて、くらがりにて欠しのびし、待ゐたるに、さうじ明けて来て、閨に入るものありさぐり見れバ、男の衣服着てあり、それハ女が、わが小袖着たりしなりとおもひ、抱きつきてまつ口をねぶる、そゝぎし口にしてハ、また臭しとおもふ、佐多ハあまりの打つけなりとおもへど、袖長き小袖といひ、留しかほりまで、まがハされバ、源太夫を女とおもひて、これもしかと抱きあひて、同しく口をねふる、折から嫗もくらきく出て見れど、待てをるはたごやもまた来ざれバ、道まて迎へに出て、旅篭屋連て来りしなり、嫗まづ内へ入りて見るに、女をらねバ、源太夫がふしどへ、つれて行たるなりとおもひ、わざと紙燭もさゝで、爰までたとり来しなりけり、物もいはで、ふたり寝たる中の長き袖着たるをしるしに、引分て捕らへんとす、是ハ源太夫なれバ、何事するぞといはんとするを、声たてさせてハむづかしとて、無二無三にくつハさすれバ、抱き合し佐多、それとらせじとかゝるを、嫗ハ源太夫なりとおもひ、源太夫殿にもあれ、なまうるさしとて取て投のけ、媛と思ひし源太夫を、用意の縄にて、矢庭にひつくゝる、佐多起上りて所をたどりて、爰に来りぬ是ハさきに醴買ながら、門近

何事し給ふぞといへバ、佐多までこゝに来りしか、誰にもせに邪魔なりとて、また投のくる此物音に、旅篭屋の者どもハ、かやうの事に馴て女が承引せぬなるべし、加勢してとくつれ行んとて、わらんづのまゝ、竹輿を此一間の口まで舁入たれバ、嫗心得て、もかく源太夫を蜘のい（囲）のやうにからめて、竹輿におしいれ、戸をしかとさしかためつ、はたごどもハこなたの間へ来て、金わたしてやがて舁て出行ぬ、佐多ハふたゝび投られし時悶絶せしが、心つきて起あがり、あの竹輿ハやらしとて走り出れバ、嫗引とらへ、汝わが買物の宝の試せんと思ひしな、あれハ追かけても、汝が手際に取りかへされじとて打笑へバ、佐多も今さらはづかしくて口こもりたり、さるにても源太夫め、いづれにかといへバ、佐多西の間に寝て、肩衣屏風にかけありしといふ、嫗不審ながら佐多をつれていきて見れバ、案のこと屏風ハたてあれと、肩衣も夜のものもなし、佐多ハ、笛の事顕ハれてハ叶ハしとて、やがてそこを逃出て、あとをくらましてうせぬ（失）、嫗ハ其夜ハ金などかそへて、明る日の朝になりておもふに、せんする所こゝに居りてハ危からん、外へいかんずとて、道具とも出し見るに、宝に仕置し横笛なし、佐多が居らぬハきやつか仕わざならんとて、くやしがれともせんかた

なし、扨したくよくとゝのへて、又いづ地へかうつり住しと
□聞えし、此二人が果々いかゞなりけん、扨又浄瑠理
媛のやうに見せつる女ハ、女にハあらず壬生の小猿
にてありけり、小猿かの随泉寺の墓所より、濃紫の
小袖と、落毛鬘をとり来り、瑠理君の死せるや死せ
さるやハしらねど、これを明くれ身に従がへて、記念と
おもひてなぐさめけり、然るにまだ頼むべき主もな
もなけれバ、仕なし事ゆゑ、ふたゝび田楽に身を隠て
けり、然るに是も信濃の、善光寺あたりに田楽あり
て、下りけるに、かの横笛を嫗が持てをる事聞出し、
田楽の芸よりおもひつきて、かの鬘にて女のやうに髪
をゆひ、扨小袖をも着て、嫗か所へいきて、奪返さんと
おもひしに、折から源太夫にも逢けれバ、すべて田楽
の狂言のやうに、かくたくミて、たばかりなりとぞ、か
くて源太夫が衣服を着て、かの騒ぎのまぎれに逃
出けるをりふし、雪ハをやミてぞありける、されども此小猿
義心を守り、横笛をバ、牛若殿の方へ持てや行けん
さても此頃、まことの浄瑠理媛ハ、伊勢の三郎が方に
おハして、すでに失せ給ふべかりしを、吉次いミしき医
師をつれ来りて、薬参らせしに、其御薬的中して、誠
万死を遁れ給へり、此医師も仏の導かせ給ふならん
とて、人々ハうれしき事にぞおもひける、そも〳〵過

し日に、矢矧と木曽へ出せし使、これよりさきに帰りしかど、牛若丸ハ都へのぼりておハせず、長者ハよろこびながら煩らひてあれバ、下りがたしとて、みないたづらなりけるに、吉次が来りて、第一に医師を得給ひしこそ、いともめでたき御事なりけれ、されど吉次ハ都への帰さなれバさハやきかたなるを見て、矢矧へも都の牛若君へも、此事告たてまつらんとて、やがて別れて登りけり、あな哀れやさばかり吉祥天女のやうなりし御顔ばせも、目鼻ひとつ所へとり寄たるやうにて、誠に見にくゝなり給ひけれバ、瑠理君ハいのちこそつれなきもの、中々に死たらんこそまさらめ、生れもつかぬ此ミにくき顔にて、いかで父君にも、牛若君にも逢まいらすべきぞとて、御袖のひる世なく嘆き給ふを、三郎夫婦色々に、なぐさめこしらへけれども、瑠理君ハとかくにおもひとゞまり給はず、身を投て死ばやと覚して、ある夜ひそかに忍び出給ふ、此家の裏を流る獺寝川ハ、筑摩川の枝川にて、ながれこそ早けれ、あまりに深からねバ、死損じてハ中々なり、深き所にてと覚して、岸にそひて、おもはず一里ばかりたどり行給ふかくまでおほしきハゐ給へども、今ハになりてハ、跡に心のひかれたまひ、都の父君をも捨奉り、三河の父君の、撫育の恩も報ひ参らせず、不孝にさすらへ

ありきて、剩牛若君にもあひ参らせず、死行身より
も、残り給ひし御歎こそ思はるれ、わが心にくらぶれ
バ、人々にも、かならずの給ひたき事あらん、それに亡
屍をものこさずハ、またもや悪党に、さそハれしやなど
おぼして、いよ〳〵の御歎やまさりなん、まつさし当り
て、三郎夫婦吉次などが、盗人の難をまぬがれさせ、
もがさ腸の病などよく、看病して助けくれつるを、さこ
そかひなき事におもふならめなど、さま〴〵と打歎
給ひしが、されどいかにも〳〵、世にながらふべき身なら
ず、くり言に隙どりて、追手に逢ひなバせんなしとて、打
見給ふに、さゝの所ハ水勢するどく、渦まく所なども見
えたれバ、あの世の岸へいたらせたまへとて、念仏唱へ
て、やかて飛んとしたまふ所に、ひとりの男、あとのかた
より伺がひ寄しが、松明そこに投すてゝ、つとかきい
だきて、何地へかつれ参らせける、これも盗人にか、はた
いかなる人にか

浄瑠理媛物語巻四　畢